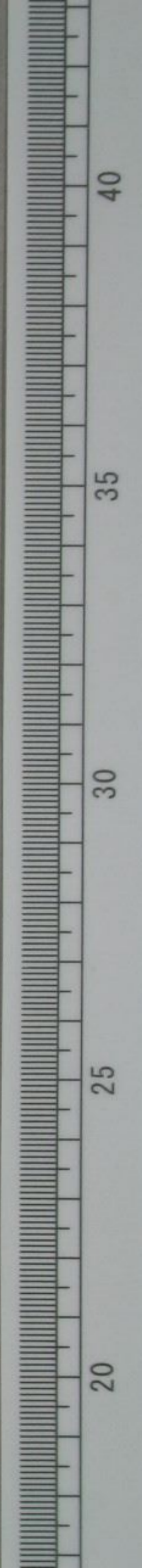
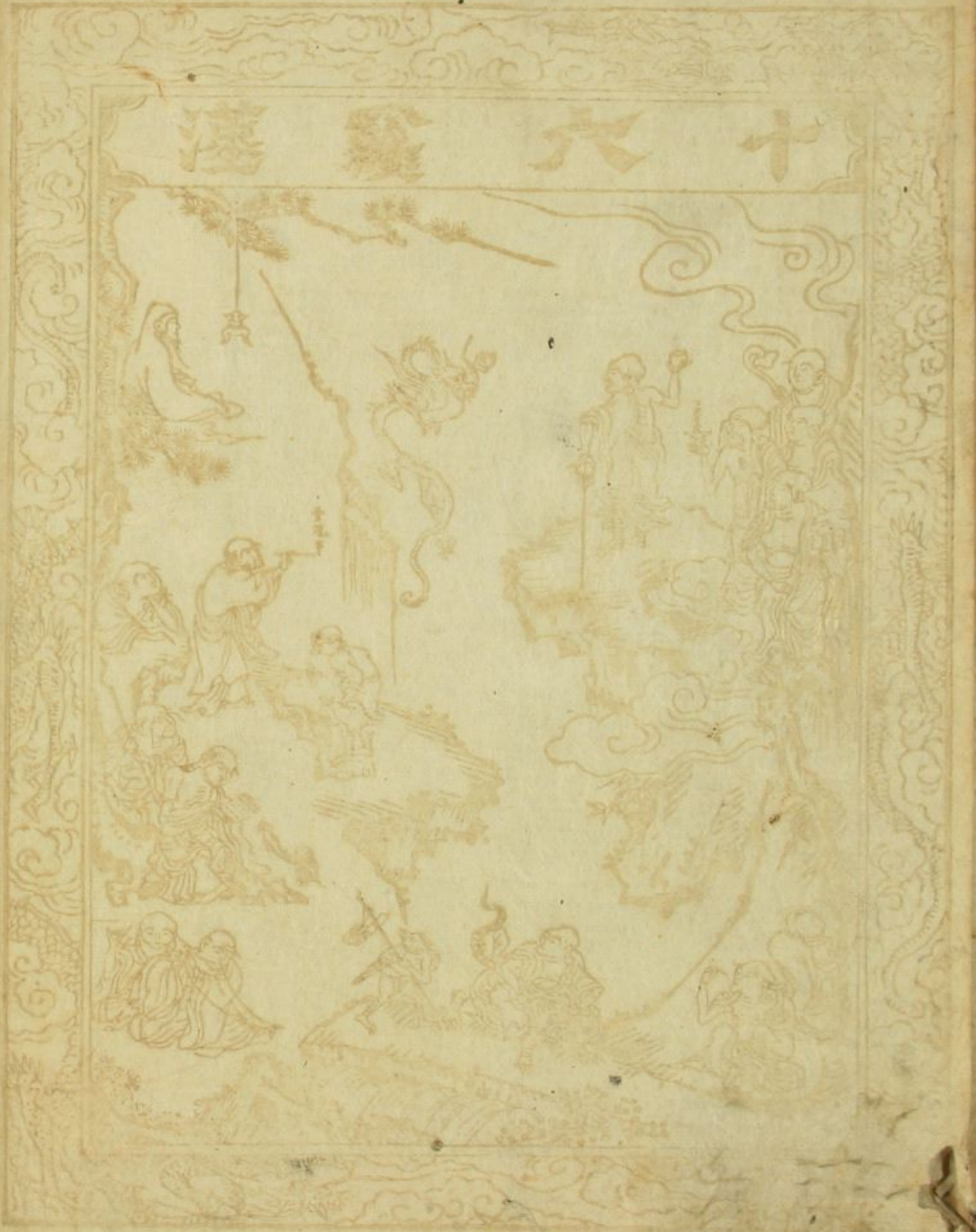


書函室鑑
一

千4
1077
1



冊 子多4
1.077
1



繪本寶鑑發題

凡畫有六灋。一曰氣韻生動。二

曰骨力用筆。三曰應物象形。四

曰隨類賦彩。五曰經營位置。六

曰傳移模寫。得之心而運之筆

則可謂妙手矣。中間有橘宗重



者依貴人之需所撰斯書也。余
 來後去先而雖不相遇每閱於
 其書即非不感其為人盡心為
 已學道矣惜哉手澤久而殺青
 為之蠹縹緗為之德。余雖庸昧
 匪才竊正其反乙補其闕畧削

其重複使長谷川氏圖焉志于
 畫圖者開卷之際六法不學而
 在焉斯且不忘于畫圖者當知
 往古之人品識畫圖之故事故
 今也繕寫校正而屬之書林鏤
 梓而以壽于世云。脊負享龍集

疆梧單闕畧維良辰

難波東軒藤貞漢由書



自序

それえりちるひやくきくせんう
夫天地開闢而山河
乃正萬物所立
る情水情皆も
此の
中より春見え
像之始ら
畫工乃畫
我をわ
伏羲の何
紀遠道
何わと
龍を
と試す
漢教和
於畫之
を事
勢分
別異
となし
故
如何と
あれ
ば
丈
山
尺
樹
寸
鳥
巨
人
之
法
哉
云
幸
樹
子
枝
た
く
幸
山
に
穀
あ
る
を
承
れ
ん
故

ありき事とと齊一亦同遠山の徒色山
 高き皆けけと背びれ繪者玉栴合殿
 の糖最のまゆねは又取れありき
 賢くささと知近き人々情と誠或は
 信や智誠系或世俗の教誨とけい
 かく武士描之別武備の一物をたれ
 戦味と寫り魚鱗りかきば好翼り
 そまふ海城海へ大おらうば敵相伍城

可く人海海と毛筆之筆一乃公也
 脊年の勇士名いささかあ文武あるを
 思へばあ線兵を丹着にんと移し武威
 看にもえそ道とあひとや是英雄に
 文武の士成魚へあまの烟魚の芦鷹漢
 海城魚にま望とら者公と移り洞をり
 於のひと好海舟と呼ぶと去んとし
 是丹著ありや神とや毛畫之神

橘氏 宗重著

藤 貞漢再考

畫師 雪舟嫡流

法橋宗圓子

長谷川氏等雲



繪本寶鑑卷第一目錄

才一

楚莊絕纓

才二

聖人賢人

才三

巢父許由

才四

劉劭

才八

司馬相如

才六

尾生

才七

韓退之

才八

東坡李長推

才九

仁公子

才十

義筆公箱

才十一

大公望

才十二

范蠡

才十三

嚴子陵

卷第二目錄

牙十四 李太白

牙十六 王羲之

牙十八 金花石

牙二十 毛寶白龜

二十二 潘罔

二十四 日能

二十六 酢吸三教

牙十八 林和靖

牙十七 黃石公

牙十九 蕪武

二十一 魯婦

二十三 賈嶋

二十五 三笑

二十七 商山四皓

二十八 七賢

三十 紗門

三十二 意馬心猿

三十四 瓢簞推轂

三十六 陶淵明

卷第三目錄

三十八 煮膏

四十 齊衣破環

二十九 伯夷叔計

三十一 猿象龜

三十三 一龜二孺

三十五 牡丹睡櫻

三十七 孫明府

三十九 巨靈人

四十一 姐奴

四十二

将雅卷尾

四十四

戴安道

四十六

金河金主

四十八

船松心人

五十

上利劔

五十二

列子

五十四

芥柯

五十六

一角仙人

四十二

起正持合

四十八

西王母

五十七

費長房

四十九

洪楊

五十一

洪伯房

五十三

初平叱羊

五十五

張果郎

五十七

琴之

五十八

魚教

六十

源康

六十二

車胤

六十四

月支

六十六

婦嫁

六十八

勅使定山

卷第百目錄

六十九

韓夫人

七十

寶篋

七十一

東坡

七十二

鸞

七十八

子期伯牙

七十七

卞和璞

七十九

八景

八十一

昭古海

八十三

福祿壽

八十八

呂樂轉和

七十二

秦始皇

七十二

七夕

七十六

王照君

七十八

倪寬

八十

孝母

八十二

仇楚俊

八十四

念力透石

八十六

鹿馬圖

八十七

四知

八十九

楊中仙

九十一

遊

九十三

口賢洞

九十五

目義叔

九十七

貨狀

八十九

馮媛

九十

孔子十哲

九十二

一眼之惡

九十四

山谷

九十六

五法

九十八

楊家黃雀

卷第五目錄

九十九

紀昨秋如來

一百

桃蒼悟道

會本教員錄

百一

將行悟術

百二

月下大笑

百八

蜆子

百七

原師裁松

百九

越瓦朽子

百十一

船子使山

百十二

馬祖

百十五

二祖立雪

百二

丹庭本佛

百四

猪頭

百六

知門蓮華

百八

壽山安子

百十

六祖

百十二

母鴨子

百十四

托鉢僧

百十六

二佛堂

百十七

柳樹子

百十九

善化

百廿一

睦列

百廿三

穴睦

百廿五

大隨色法

百廿七

丹霞毒眼

百廿九

金米飯桶

百卅一

高亭樓鐘

百十八

老猿穿袖

百二十

孝女

百廿二

俱胝雙指

百廿四

御衣押紙

百廿六

乙峯決弓

百廿八

仰山紅牙法

百三十

西廡乞食

百卅二

多果

百三

白紙折梅

百四

由山梅經

百六

多教樹

百五

女子出定

百七

霧法湯瓶

百八

六祖風幡

百九

南泉牡丹

百十

竿吹を吹

百一

乳華一沙

百二

大中を吹

百三

易杵茅短子

百四

善妙一枝草

百五

淨土之白

百六

文殊を看回

百七

淨土法壇

百八

黃染毒抄

百九

黃山梅る刀

百十

素色覆部

百一

高年之末粧

百二

赤巾交岐着及

百三

生次能経師

百四

板子一斤石

百五

意の一盆水

卷第六目録 畢

百六

達磨辨五

百七

武帝を慶

百八

一栴檀

百九

隻履達

百十

一花達

百一

沙衣を吹

百五十二

一葦達戸

百五十一

面砂子産戸

百五十

徳山久門指

百四十八

烏的棒

百四十七

南泉一虎回着

百四十六

仍山仰山持茶

百四十五

修子苦老庵

百四十四

仍山竹篋

百五十二

板齒達磨

百五十一

修山持茶

百五十

深明二上座

百四十八

酒山持茶

百四十七

支殊三上座

百四十六

茶山持茶

百四十五

新修減坊

百四十四

曹山圓都

百七十八

盤山持茶大板

百七十七

南泉一圓相

百七十六

仍山劃一劃

百七十五

黃檗虎考

百七十四

仍山持茶

百七十三

仍山持茶

百七十二

仍山持茶

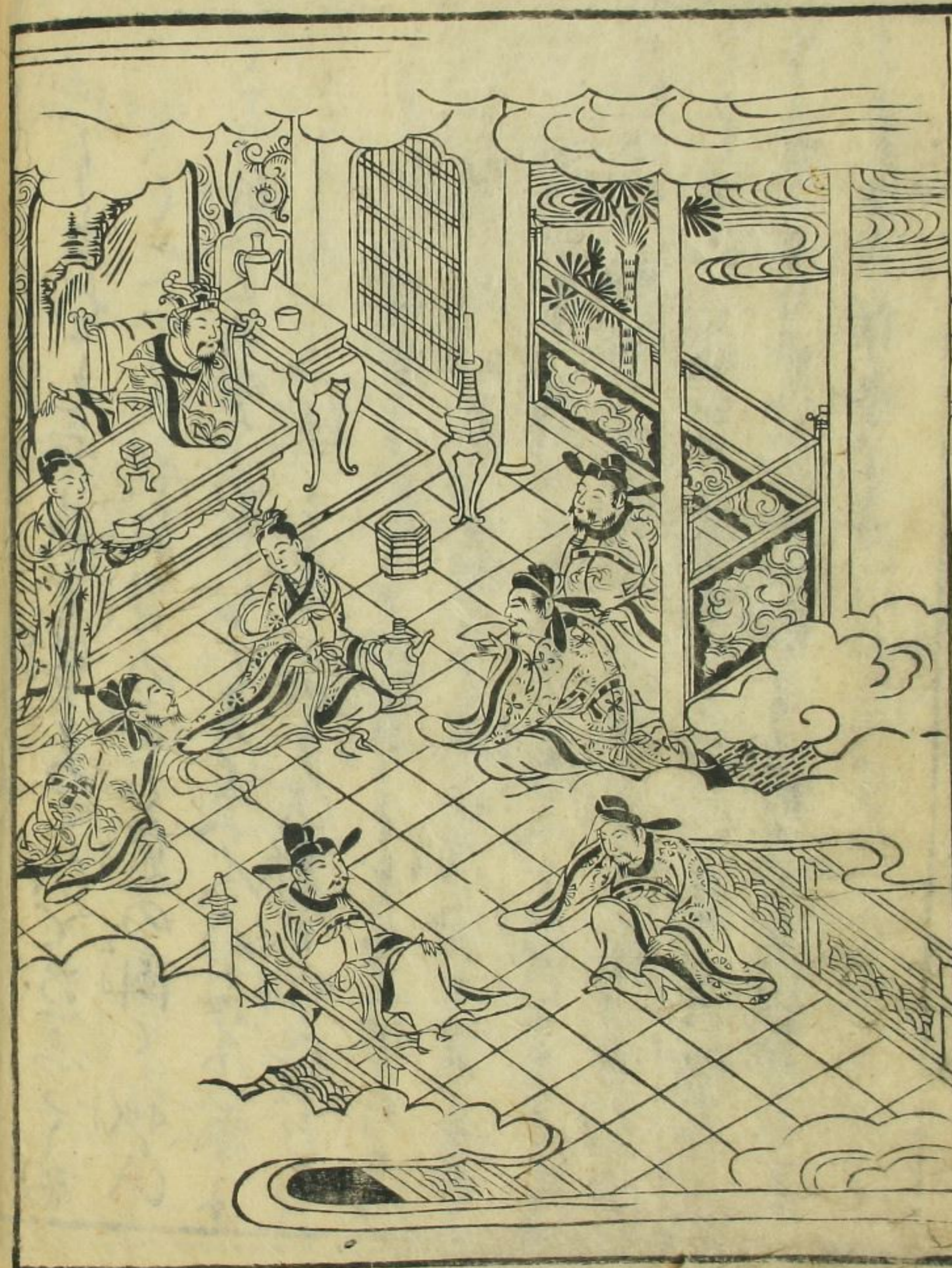
百七十一

仍山持茶

會本教目録

え身具と催さんふれは宴なれど。どづるはよ。
人とはさかひんを仁道ふらふと。龍顔かつくと。お
解させ給ひ。美人ふ侍るは。ゆがふと。しら神妙を
されど。と。朕はと。信下は。あらうと。うら。び。奈何ぞ
婦人の節と。うらうらさんうて。まら。そのと。辱を
やま。す。あつらふ。あの人。う。命。あ。う。曰。今日。あ。も
とも。ほと。研で。研。と。に。甚。と。そ。を。研。ら。た。め
ま。み。よ。皆。冠の。端。と。ふ。ひ。を。う。た。ま。ら。る。め。の。い。ら。あ
う。ぐ。と。あり。う。ま。だ。百。餘。人。を。う。ら。信。下。を。を
端。と。う。ら。と。せ。た。れ。だ。と。と。く。に。尖。と。う。け。わ。れ
ごと。み。れ。冠の。端。と。う。ら。う。ら。ゆ。人。美人の。衣。ひ。た。ら

と。ゆ。う。それ。を。と。ま。れ。ど。う。ら。う。ら。び。と。お。ま。り。相
酒。高。い。と。そ。ふ。ら。う。願。在。晋の。は。と。楚の。國。と。戦。ひ
と。ら。り。楚。と。あ。わ。う。り。し。と。ま。ら。よ。一人の。信。下。前。よ
ふ。さ。かり。え。う。び。飲。み。合。く。む。う。び。首。と。切。獲。た。ら
ま。ら。飲。と。追。退。す。卒。は。勝。軍。と。を。あり。う。ら。う。
莊。王。あ。や。み。い。う。あ。つ。ま。の。そ。と。い。信。下。と。う。ら。や
酒。と。懸。信。よ。は。ゆ。り。し。と。ま。美人。は。端。と。ま。ら。し
りの。あり。と。う。ら。う。れ。と。その。信。信。と。新。と。ま。ら。し
と。P。ら。る。と。あり。是。甚。と。そ。仁。愛。宥。怒。の。情
ゆ。り。く。ら。ゆ。人。お。なん。城。う。り。の。が。た。れ。い。う。ら
ぶ。し。あり。けん。



第二 聖人賢人

亂由不納履李下不整冠と云は詞と見えたり。是ハ
 聖人の心をわし。聖人の心ハ温厚とやうくおもはる。其ハ
 ことりなきことなり。ことごとしはのほに遜讓と云ふ
 ことりて人の疑ふ事と云ふ。聖人の徳と云ふ人の
 心と云ふがう。されど賤しき人の植。聖人の田と
 ことりて。履の脱らと直さば人あはれや。しと
 申のん。よのぬなり。又李みまの木の下のと
 此時。冠のむじとて。これと云ふ。人まはれ
 や。疑ふん。思惟て。終る。詞と云
 えず。戦兢と云ふ。けし。必ふと云ふ。

ある縁とてそ大徳の顕つるものぞ
 凡由取履梨下直冠是の賢人乃心なり賢人
 の心操五角こころよく物よけすも賢人の水精
 のぞく賢人の水精とて水精水の色も賢人の
 也あまもとも水精のいやく光耀のひかりあり
 がとくちよよろしく我なるよあつごまの
 さくふ珠一だく凡の田とつる時後乃脱
 とて凡のいふ何ぞ履とつるさうむわんや
 亦梨下とつる時冠のいふとつる賢あり
 何あつんとつるさくふ珠とつる賢あり
 とつる賢とつるは賢人よむむむむ

か又ありよの縁心むむむむむむむむ
 かいぐらあり一むむむむむむむむむむ
 いんやも賢徳ハ
 又大かむむむむ
 此とれむむむむ
 く遠むむむむ
 知むむむむむむ
 まはむむむむ
 物やもむむむむ
 縁むむむむむむ
 むむむむ者あり



身三

巢父許由

巢父許由ハ世とのづきて山林に隠れ人あり。賢人の
 去らば。堯王代と懐くんと。許由に勅使と下りきりり。
 許由辭去く。楫をこらりて城をくそく。歸川に灑子
 耳を洗ひひらり。かろりて西へ。巢父牛のわらんと
 ありし。が。是をこらりて。そらりて。許由をたれり
 と。河に。巢父驚き。新けをこらりて。耳を洗ひ。流し
 めんせ。さ。い。さ。き。ら。さ。牛。の。何。ん。や。と。て。己。の。身。ん
 と。して。曰。汝。楫。持。と。み。ど。や。新。鬼。の。け。り。き。不。子。文
 と。たり。こ。岨。の。水。を。洗。ひ。て。人。の。身。を。洗。ひ。て。は。故
 工。匠。の。伐。と。ら。り。と。事。を。免。れ。り。と。く。乃。を。を。つ。は。

歌をこらりて
 位ありはあを
 堯の使のたれん
 やをを洗ひたり
 許由洗耳
 巢父牽牛
 序と
 たり



第に

劉訓

劉訓をりし人の好んで黒牛と飼つる。或時け牛城
 屋前の盛つたり。牡丹のゆふ繫本。目とあやま
 め飛つるところ。客あつて牡丹乃妖艶とあやま
 うらうらき文とあめつらに劉訓ハハハ牛の事と
 のを對へける。是らか牛の事とあやまて人のこ
 ばと申す。

さしつるあつる。

牛とあしつとらう。

是ら佐と牛乃異と

黒牡丹といふ



才人

司馬相如

唐去蜀城乃北七里に昇仙橋あり。司馬相如と云し人。
 学文より時、け橋をよびてとて曰。大丈夫、駟馬の車、小

のどいげ橋と云ふは、武騎將軍とあり。彼橋を後にゆりしを
 思ひぬまゝに武騎將軍とあり。彼橋を後にゆりしを
 たりげんと大和守とあり。橋川院百首の橋れ歌の歌
 橋よと橋のくらよとて昔の人々を橋まかり 匡房
 我はさけ君よあつらん海じと君と云は橋よをみん
 定家百首の橋の下の山吹
 橋のくらよとて昔の人々を橋まかり 匡房
 橋のくらよとて昔の人々を橋まかり 匡房

いづれそ自よやまづれのなら



第六 尾生
 尾生と云し人ハ信と云りて人也。或時女と誓つて
 あり。今宵ハ橋の下に居んと云ふ約はあらず。尾生

先立て彼橋の下ふり
 時依も水も事りけり
 約と遠く一とそおとさ
 流るる水も死とそひの
 るよ摩さる也豊間集
 ころ。ほよ女果てを
 飛と川時とて尻をも
 ハ控たとささるるの
 とささるるささるしと

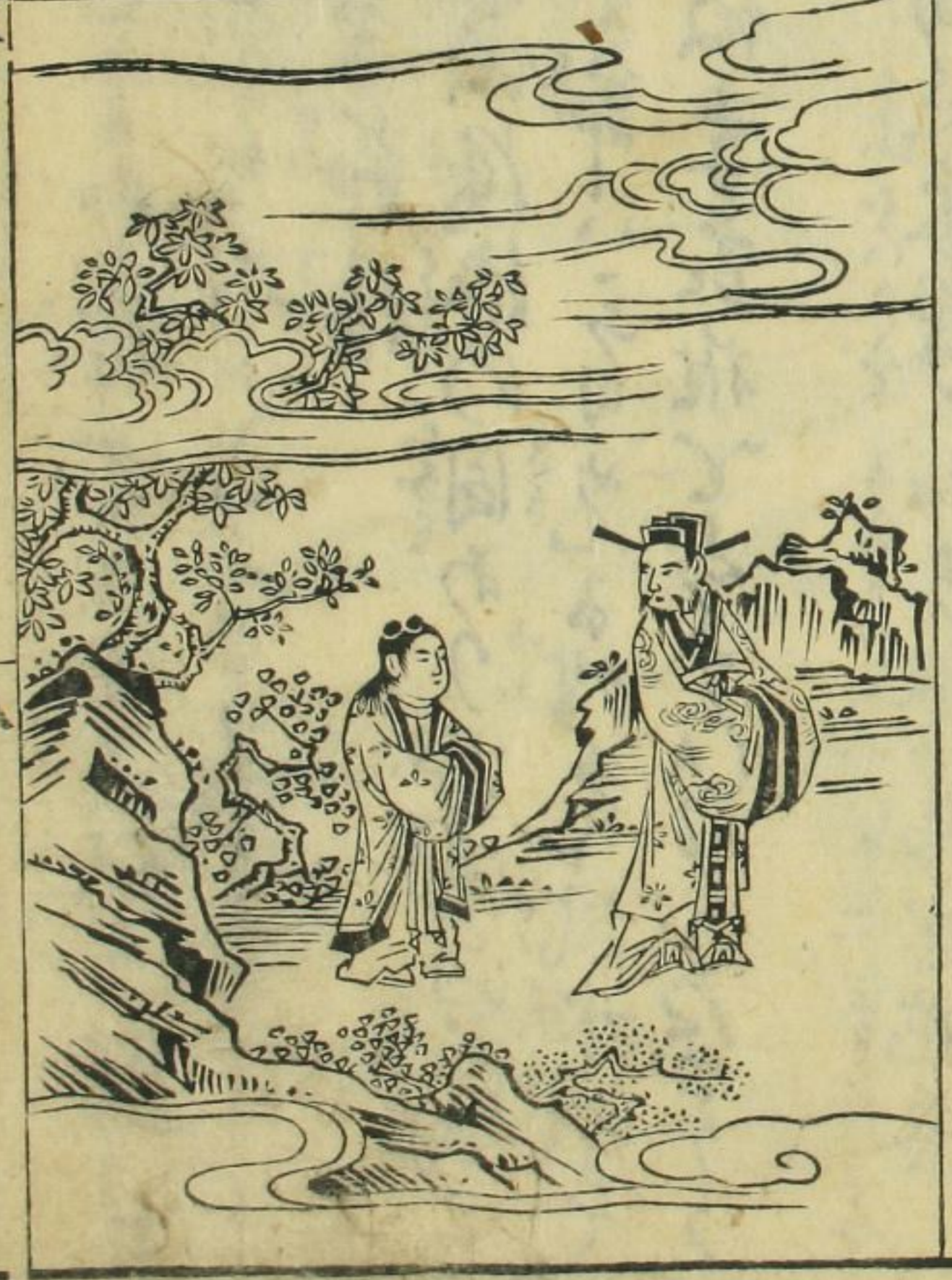
ささる



才七

韓退之孟東野

韓退之と孟東野の
 美の年ありしに
 時韓退之の
 たつとつたつた
 死つたつたつた
 ぬはつたつたつた
 んとつたつたつた
 若くつたつたつた
 らつたつたつた



らんを驚りしとや。韓雲孟龍乃約とてその
れゆきとて。こころりあつてふなるべし

才八 東坡李節推

李節推より東坡風流の因あり。富湯の新と
ふ所へゆき。李節ハ二首先の姓と。風水洞まで
東坡とて。東坡李節推とて。いひつたす
の云ふなり

溪橋曉溜流 毒夢 知馬敷系馬岩花落

いかなのと下あまごを 伝せり小違あつて
此二首とていひく 云ゆらかり 元け 去り
白け 例とていひく 准知るし



第九

仁公子

仁公子ハ好んで釣る人なり糸二筋と竿子一
毎乃魚とけりしとや

第十

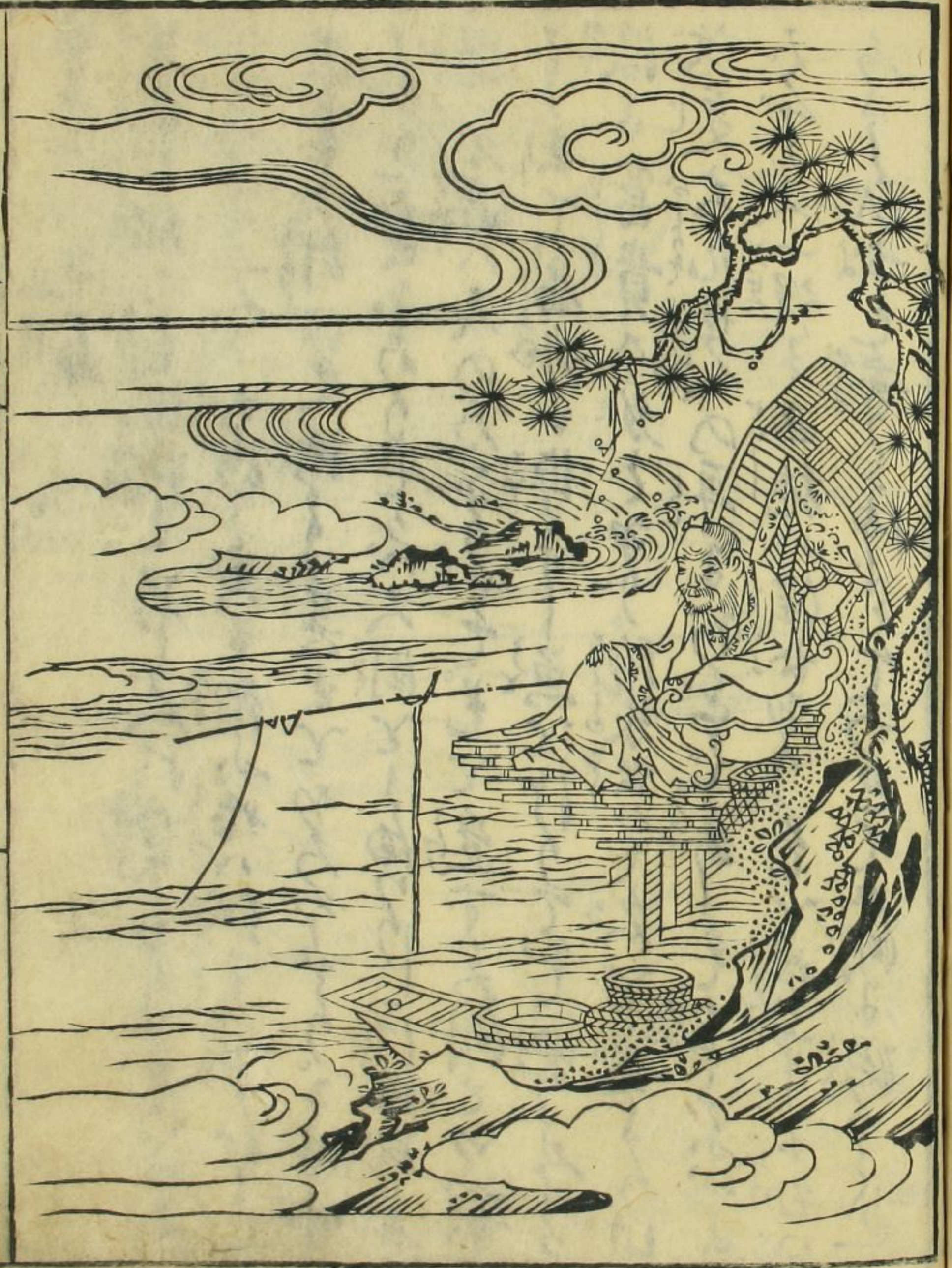
義公

雪乃ふりに義公とて舟とて釣る所と書ハ
独釣寒江雪と云辭ありとや

第十一

大公望

大公望ハ渭濱に釣る人なり文王賢
佐と欲し給ひ此の時にて彼を召り侍りて
詢りぬとや



身十三 教子凌

教子凌着子時。老武と一一人と孝回の如く。
 ほよ老武帝王とありし。ば老武凌ふと老武之隠
 者とあり。老武一老武影をば。老武帝昔の族一
 かりし。老武影をば。老武帝昔の族一
 ありし。老武影をば。老武帝昔の族一
 ありし。老武影をば。老武帝昔の族一
 ありし。老武影をば。老武帝昔の族一
 ありし。老武影をば。老武帝昔の族一
 ありし。老武影をば。老武帝昔の族一
 ありし。老武影をば。老武帝昔の族一
 ありし。老武影をば。老武帝昔の族一
 ありし。老武影をば。老武帝昔の族一
 ありし。老武影をば。老武帝昔の族一

教子凌着子時。老武と一一人と孝回の如く。
 起と帝傍小老と一子凌が腹と抱給ひ。時良久
 ちく目とひきけり。ぐんもつ。曰昔堯王徳とあ
 らり。ちくごも。果父は耳其志とさげぬ。
 て何のゆゑか。お迫らしむ。と帝歎息
 ちく。歸り。給ふ。ほよ文林。ちく。
 ちく。ちく。帝王子凌若も。
 の。ぐん。帝王乃。
 現ん。大史。
 子凌。我。
 後大史。

富^ふ山^{さん}といふ^{いふ}は
 ゆき^{ゆき}て^て耕^{こう}作^{さく}と^とぞ
 ち^ちり^りたり^り元^{もと}始^{はじ}世^よ
 と^とら^らと^との^のら^られ^れ人^{ひと}
 あ^あら^らと^と。岩^{いわ}凌^{りょう}津^{しん}と
 り^りと^とあ^あん



